

第二部 クリスチャン生活

|     |                 |
|-----|-----------------|
| 第一章 | 新生したばかりのクリスチャンへ |
| 第二章 | 喜んで捧げる祝福        |
| 第三章 | パウロの刺           |
| 第四章 | 落胆したとき          |
| 第五章 | 友なるイエス          |
| 第六章 | 御心を確認する方法       |

## 第一章 新生したばかりのクリスチャンへ

私がクリスチャンになってから、五〇年の歳月が流れようとしています。その期間、私は御言葉<sup>みことば</sup>を宣べ伝え、自分自身もその教えを理解しようと、努力を重ねてきました。ですから、たといわずかであっても、信仰に入ったばかりの若いクリスチャンの方々を助けることができるのではないかと思います。

その意味で、これからお話しする私の失敗を含めた様々な体験を、神がお用いくださるなら、皆さんがここに来られたことは決して無駄にはならないと思います。皆さんが天国への道を行くために、何らかの助けになることができると信じます。

私はこの目的のために家を離れ、各地を巡りながら御言葉を宣べ伝えています。それは、若いクリスチャンの助けとなるためです。

## 御言葉の読み方

信仰生活の中で最も重要なのは、注意深く、また祈る心をもって神の御言葉を読む

ことです。さらには単に読むだけでなく、黙想することです。

そこで今日は特に、ペテロの第一の手紙の一節に注目していただきたいと思えます。なぜなら、特にこの主題に関して、聖霊が使徒ペテロを通して訓戒をお与えになっている箇所だからです。

文脈を理解するために、この章の第一節も含めて読んでみることにしましょう。

「ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋なみことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。」

(第一ペテロ二・一二)

今日、私が特に分かち合いたいと考えている箇所は、第二節の「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋なみことばの乳を慕い求めなさい」という御言葉です。

私たち人間の肉体的成長は、それにふさわしい食物を採るかどうにかかっています。霊的成長に関しても、実は同じことがいえます。私たちの内側に神にあつて成長したいという願望があつても、それはただ神の御言葉によって可能となります。この聖句は決してある方々が思っているように、「ある状況にあつては、御言葉を読むことが意義深いものになる場合もある」と述べてはいません。あるいはこの箇所さえ読めば、益を受けることができるとも述べてはいません。ここで使徒ペテロは御言葉全体のことについて語っているのです。

### 御言葉を慕い求める

あのトラクトを読んで恵まれた、この本を読んで強められた、といった言葉をよく耳にします。そのことに疑いをさしはさむつもりはありません。しかし神がクリスチャンを強めるために用いられる主な手段は、御言葉そのものなのです。そしてキリ

ストの僕たちは、御言葉をどれだけ尊重するか——その度合いに比例して、主にあつて強められます。ですから逆のこともいえるわけです。御言葉をないがしろにする度合いに比例して、クリスチャンは弱められてしまうのです。

生まれたての赤ん坊がきちんと世話をされないで育つ場合、その結果はどのようなものでしょうか。子供たちは、幼少期に世話をされることがなかったなら、決して健全な大人として成長しません。中でもきちんとした食事を与えられなかったら、成熟することができません。信仰生活にも同じことが当てはまります。新生したばかりの初期の段階で、健全な食物を採ることは非常に重要なことです。

それでは、その食物とは何でしょう。純粹な御言葉の乳です。これが新生したばかりのクリスチャンの霊的生命を、何にも増して強める栄養素なのです。

ですから御言葉に関するいくつかの助言に熱心に耳を傾けることをお勧めします。

## 聖書の通読

まず第一に重要なことは、聖書を定期的に通読するということです。決して自分の好みであちらこちらを読むべきではありません。そうではなく、注意深く通読する必要があります。私自身、このような方法で過去四六年間、御言葉を読んできました。そして途方もないくらい大きな祝福にあずかることができたのです。

なぜ四六年間で、五〇年間ではないのかといいますと、クリスチャンになって最初の四年間は、あまり注意深く聖書を読まなかったからです。その頃の私は、トラクトや興味深い本などを読みあさったものでした。私は御言葉の力を知らなかったのです。聖書をほとんど読まなかったため、当時すでに説教者としての働きについてはいたものの、クリスチャンとしてあまり成長を遂げることはできませんでした。

その理由は単純で、御言葉をなおざりにしていたからです。

しかし恵み深い主は、愛する一人の兄弟を用いて、私に御言葉への飢え渴きを与えてくださったのです。それ以来、私は御言葉を愛する者となりました。

もう一度繰り返します。御言葉を定期的に通読することをどうか忘れないでください。

恐らく多くの人々は、すでに聖書の通読をされていると思いますが、まだされていない人に、この点を力説したいのです。

まだ実行されていない方々は、どうかすぐにでも始めてください。まず旧約聖書から始めてください。一章か二章を読んで、聖書を閉じる時にはどこまで読んだか一目でわかるように印をつけておきます。新生して間もないクリスチャンの益を考えて、単純にわかりやすく語らせていただいています。次に聖書を開く時には、新約聖書を読み始めてください。そして旧約の時と同じように、聖書を閉じる時には、どこまで読んだのか、印をつけておくのです。このように旧新約を交互に読み進めると、少しずつ、聖書全体を読むことができます。そして聖書全体を読み終えたなら、最初に戻り、同じことを繰り返すのです。

## 聖書の関連性

聖書を通読することが、なぜそれほど重要なのでしょうか。

理由は簡単です。それは聖書の一つの書と他の書との間にある関連性を理解し、また一つの章と他の章との間にある関連性を把握するためなのです。聖書を通読をしなければ、神が私たちを導くためにお与えくださった聖書の教えのほとんどを無駄にしていますのではないでしょうか。私たちがクリスチャンであるなら、なおさらのことです。私たちは、神が啓示してくださった主の御計画全体——聖書全体を知る必要があるのです。

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」（第二テモテ三・一六）

主が明らかにしておられる神の御心全体を注意深く熟読することによって、計り知れない益を得ることができます。たとえばお金持ちの親戚がいたとしましょう。そしてその人が死に、土地、家、お金を残してくれたとしましょう。その場合、私たちはその遺言状の中で、自分と直接関係があると思われる条項だけしか読まないでしょうか。そうではありません。むしろ、遺言状全体を慎重に読むことでしょうか。まして私たちが今扱っているのは、生ける神の言葉なのです。ある特定の書や章でなく、神の御心全体を注意深く読むのは当然のことではないでしょうか。

## 通読から得られるもう一つの益

このように注意深く御言葉を読むことには、自分勝手に教理を造り上げることから守られる、という利点があります。また非常に有害な、自分好みの考え方をする危険

からも守られます。私たちは、とかく自分に直接関係する御言葉だけに心をとめ、真理の一部分のみを強調する傾向があります。しかし主の御心は、神が啓示されている思いを総合的に捉えることにあるのです。確かに、神に関する事柄と一言でいっても、様々な面があります。そしてその一つひとつの何とすばらしいことでしょうか。この様々な事柄を明らかにしておられるのは、神御自身なのです。ですから主の計画に従う神の子供は、御言葉のどの箇所であろうと、関心を抱くことができるのです。

ある人が、「レビ記と一緒に読みましょう」と言ったとします。それはすばらしいことです。また「イザヤ書を読みましょう」と別の誰かが言ったとしましょう。それもまたすばらしいではありませんか。また別のもう一人が、「マタイの福音書を読みましょう」と言ったとします。それもよいではありませんか。どの書であっても、私は喜んで読むことができます。旧約でも、新約でもよいのです。預言書でも福音書でも、使徒の働き、あるいは書簡集であっても、何の差別もなく受け入れるのが当然なのです。神の言葉であるなら、どの箇所であろうと、喜びをもって読み、研究することができるのです。

### キリストの働き人にとって特に有益

聖書通読は、キリストの働き人として主の果樹園で奉仕する場合に、さらに有益なものとなります。なぜかという、ある聖書箇所を説明するときに、聖書全体を参照することができからです。新約でも旧約でも同様に読み、御言葉全体に喜びを覚えるようになるのです。私は以前にも申し上げたように、過去四六年間、このような聖書の学び方をしてきました。現在七〇歳近くで、救われてから五〇年近くになります。が、神の恵みにより次のように言うことができます。

私は現在、以前よりも御言葉を愛しています。そして今まで以上に、御言葉を学ぶことに喜びを見い出しています。

さらには、これまで私は聖書を一〇〇回近く通読していますが、聖書に読み飽きることはありません。そしてそれは、自分の思索が右往左往するのにまかせて、こちら

の一章、あちらの一章を読むのではなく、日々規則正しく聖書を通読するときに、特にいえることなのです。

## 聖霊の助け

さらに重要な点がもう一つあります。聖書を学ぶ時には、祈りつつ読む必要があるということです。自分の知恵によって神の言葉を理解できるほど、自分は賢いなどと思ひ込んでなりません。聖書を学ぶ時には必ず聖霊の助けを仰ぐことを忘れないようにしましょう。主イエスの御名によって、聖霊が御言葉を理解させてくださるよう求めるのです。そうすれば、聖霊は喜んで助けてくださるでしょう。

私が聖書を読む際に、聖霊の助けを求めるようになった最初のいきさつをお話しましょう。これが皆さんにとって励ましとなることを願っています。一八二九年のことでした。私は当時、ハックニーに住んでいました。愛する一人の兄弟が私のところ

に来て、聖書の理解を聖霊が助けてくださる、ということです。しかもこの兄弟は霊的に成熟した方でした。

そこで私は言いました。

「それが主の計画なら、一つ試してみよう。祈りを捧げ、注意深く聖書を読み、さらに黙想し、聖霊がどれだけ助けてくださるのか、見てみることにしよう」

私は自分の言った言葉をさっそく実行しました。自室に戻ると内側から鍵を掛けました。そして椅子に聖書載せると、その椅子の前にひざまづいたのです。こうして祈りと御言葉の黙想の中に何時間かが過ぎて行きました。確信をもっていることができるのですが、このようにして過ごした三時間で学んだことの方が、それまでの数カ月を通して学んだことよりも多かったのです。このように、私は聖霊の教えを受けることができました。

この体験を通して得た霊的祝福を、言葉で充分に表現することはできません。この三時間、私は聖霊によって祈り、それまで以上に聖霊の力に信頼していたのです。

このように理解を助けられることが、私にとってどんなに貴重で、どんなに助けに



なったかを皆さんが知るなら、なぜ私がこの点を強調するのかわかっていただけだと思います。

### 御言葉の黙想

しかし、祈って御言葉を読むだけでは充分とはいえません。さらにその御言葉を黙想しなくてはなりません。たとえばたった今お分かちしたように、私は椅子の前にひざまづき、御言葉を黙想しました。単に朗読したのでも、祈りをもって読んだだけでもありません。私はその後、読んだ御言葉に思いを巡らせたのです。これは本当に大切なことです。もし、ただ聖書を読むだけでおしまいにしてしまうなら、せっかく川から水を引いて来たのに、それが貯水池の反対側から流れ出てしまうのに似ています。御言葉から本当に益を受けたいなら、その御言葉を黙想する必要があります。もちろん多くの時間をこのような御言葉の黙想に費やすことは、誰にでもできること

ではありません。一時間、あるいは二時間でも難しいかも知れません。皆、しなければならぬ仕事があるからです。しかし、たといどんなにわずかな時間であつたとしても、定期的に御言葉を読み、祈り、さらに学んだ聖書箇所を黙想してください。そうすれば、あなたはその充分な報いを受けることになるでしょう。

### 御言葉の黙想を個人的なものとする

今述べたことと関連してお話したいことがあります。神の言葉を読み、また黙想するときには、読んだ内容を自分の心に当てはめるべきであるということです。この点はいくら強調してもし過ぎることはないと思います。しばしば私たちは、聖書を他の人に当てはめて読む傾向があります。親は聖書を読むと、それを自分ではなく子供に当てはめようとします。子供は子供で、横目で親の顔色をうかがいながら聖書を読みます。伝道者は会衆のために御言葉を読みます。日曜学校の教師は、自分が教えてい

る生徒たちを念頭に聖書を読みます。

しかし皆さん。これは聖書の読み方としては、非常に貧しい方法であるといわなくてはなりません。このように聖書を読んだとしても、何の益も受けられません。ですから私はあえて次の助言をさせていただきましょう。このように聖書を読む習慣は、早く捨ててしまう方が懸命です。なぜならその方が魂に祝福がやって来るからです。

御言葉を読む時は、必ず自分の心に当てはめて黙想してください。御言葉の祝福が自分の心に流れ込むと、皆さんはそれを他の方々にも流すことができるようになるからです。

伝道者として労している人、牧会者、家庭訪問の奉仕者、日曜学校の監督、御言葉を教える教師、トラクト配布に従事している人、あるいは主に対する皆さんの奉仕が他のどのようなものであろうと、御言葉を読む場合、自分の心にそれを浸透させることを肝に命じておきましょう。そして次のように自問自答してみるのがです。

「この御言葉は、私自身にどのような益をもたらすのだろうか。導きを与えるものだろうか。それとも矯正だろうか。あるいは励ましだろうか。それとも叱責の言葉なの

だろうか。この御言葉の前にひざまずくと、自分にどのような影響が与えられるのだろうか」

このような方法で御言葉を読み、祝福が皆さんの魂に注がれると、その恵みは、すぐに他の方々にまで及んでいくことでしょう。

## 信仰をもって読む

御言葉についても一言。聖書を紐解く時には必ず信仰をもって読まなければなりません。

「その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。」

説教を聞くときと全く同じように、聖書を読むときにも信仰を働かせる必要があります。つまり、聖書を単なる物語として読んではならないことです。聖書は、耳を傾けるかどうかをこちらで選べる単なる声明や励ましの言葉でもありません。そうではなく、主が明らかにしてくださった神の御心として、聖書を読まなくてはなりません。つまり、信仰を持って受け取らなくてはならないのです。御言葉をこのように信仰を持って受けとめると、大きく魂を養うのに役立ち、私たちは利益を得ることができます。ただし、信仰をもって受け取った時に限ります。このようにして私たちは、真実な信仰をもって受け取る度合いに従って、御言葉から健康と力を受け取ることになるのです。

### 御言葉を実行する者となる

最後に、もし主が御言葉の通読を祝福してくださったなら、主はその御言葉に従う

従順な子供となることを、私たちに期待しておられるということを知る必要があります。御言葉を神の御心として受け取り、それを実行に移さなければなりません。この点がおろそかになると、祈り、黙想し、信仰をもって聖書を読んだとしても、あまり役に立たないということに気づくはずです。神は私たちが従順な子供となることを願っておられ、御言葉の中から学んだ事柄を実行に移すように導かれます。主イエス・キリスト自身もこう言われました。

「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。」(ヨハネ一三・一七)

主イエスに教えられたことを実践するのに比例して、私たちには喜びが与えられます。そしてこのように神の御心を行う時にのみ、正直に心から神に助けを求めることができるのです。

この英国全土、そして全世界に、私が広めたいと願うことが一つだけあるとすれ

ば、それは、愛するクリスチャンの兄弟姉妹たち、私たちが神の言葉を聞くのにとどまらず、御言葉を行う者になるということです。恐らく皆さんの中でほとんどの方はすでに御言葉を実行に移しておられることでしょう。ですから私はまだこの事の重要性を理解されていない若い兄弟姉妹たちに、特にこのことを述べたいと思います。皆さん、神の言葉を実行する人になってください。これは本当に重要なことです。深く心にとめていただきたいと思います。悪魔はその秘術を尽くして、神の言葉をなすがしろにさせるように働いてきます。しかし私たちは御言葉を実行し、その約束に従って行動するようにしましょう。

私たちは、聖霊によってもたらされた神からの遺産として、主の御言葉を受け取る必要があるのです。

### 御言葉を通して与えられている啓示

次のことを忘れないでください。この祝福された御言葉を忠実に読む者は、聖書は父なる神について知るために必要なすべてを明記してくれていることに気づくでしょう。主イエス・キリストについて、また聖霊の力についてもそうです。また悪魔に関してもそうです。天国への道、そして天国そのもののすばらしさについても、すべてそこに書かれているのです。この祝された書物には福音のすべてが、そしてクリスチャン生活とクリスチャンの戦いのために必要な原則のすべてが書かれているのです。ですから皆さん、心を尽くし、祈りと黙想をもって御言葉を研究しましょう。そして信仰と従順をもって実行に移しましょう。

## 祈り

次の点は、すでに少しばかり触れていますが、祈りについてです。御言葉を読んで、それを的確に理解したとしても、絶えず主を待ち望む習慣がないと、クリスチャン生活における進歩は微々たるものとなってしまいうでしょう。元来私たちの中には、良いものは何も宿っていません。ですから神の助けなしに、自分の力だけで主を喜ばせることはできないのです。ですから、絶えず祈りによって主に拠り頼むことは、主の御心なのです。

祈りに関しても、主イエスは模範を示してくださいました。主は毎晩、祈りを捧げられました。ある時などは、たった一人で山に登られ、そこで一晩中祈られたのです。

主イエスはすべての面で、私たちの模範です。そしてこの祈りにおいてもそうであ

ることはいうまでもありません。古い人——腐敗した汚れた罪の性質は、私たちが新生した後であっても、まだ残っています。だからこそ、私たちは神に助けを求めなければなりません。全能者の力にすぎなければならないのです。

私たちは、すべてのことについて祈らなくてはなりません。大きな問題を抱えた時だけではありません。たとえば家が大火事で焼け崩れそうになる時、最愛の妻が死にかけている時、あるいは愛する子供たちが病気で床に伏している時にのみ、祈りを捧げるわけではありません。そのような緊急事態に直面した時に限らず、小さなことについても祈ることができるのです。朝目覚めた瞬間から、事あるごとに神に祈ることを、その日一日続けてみてください。そしてそれを、一生涯の習慣としますのです。

最近のことです。ある一人のクリスチャン女性が、三五年前にデボンシャー（英国南西部）でこの主題について私が話すのを聞いたことがあると言われました。その時にも、私は小さなことについても祈りなさいと語ったのだそうです。彼女の話によると、その説教の中で私は、たとえば小包が送られてきて、その紐を解くことができず、しかもそれを録<sup>はさみ</sup>で切ることもできない場合、その結び目を解くことができるよ

うに神に助けを祈り求めるべきであると言ったということです。私自身はその時何を話したのかをすっかり忘れてしまっていました。彼女は覚えていました。この姉妹は、どんな小さなことでも祈りなさいという私の話を思い出すことによって、何度となく、どんなに大きな助けを受けたかを話してくれました。

ですから愛する友よ。このことを忘れないでください。祈りの課題となるのに、小さ過ぎるものなどないのです。日常生活を送る中で起こってくる最も小さなことに關してさえ、祈りを捧げるようにしましょう。その時、今も生きておられる神、愛する主イエス・キリストは、私たちの祈りに応えてくださるのです。私自身、小さなこと、こんなことを祈って何になるかと思われるようなことを、主に祈り求めます。すると、その祈りを捧げた日の午前中に、いや、ある時などは祈りを終えて立ち上がり、部屋から出るときに、祈りに対する応えが二つか三つ、私を待ち構えているということが多いのです。

ですから若いクリスチャンの皆さん、聞いてください。神との歩みの一番最初の段階で、幼子のような単純さで、すべてのことについて神を待ち望むことを学ぼうでは

ありませんか。すべてのことにおいてあなたを助けることができ、またそうしたいと切願している個人的な友として、主イエスに接するのです。主の愛の御腕で一日中運ばれて行くことができるとは、何という幸いでしょうか。クリスチャンの信仰生活は、小さな出来事の積み重ねから成り立っています。毎日、私たちの眼の前には、様々な種類の小さな試練が待ち受けています。もし私たちが自分の力と知恵で、それら一つひとつの試練を乗り切ろうとするなら、私たちが現実の重さに耐えかねてしまふのに、さほど時間はかからないことでしょう。しかし逆に、小さなことも大きなことも、すべて神の御手に委ねるなら、私たちは主の助けの御手を見ることでしょう。このように、すべてを祈りの課題にして主に委ねることは、喜びの人生を切り開くことになるのです。

## まだキリストを知らない方々へ

今晚、私はおもにクリスチャンを対象にお話しています。すでに罪の重荷を感じ、キリストを救い主として受け入れ、主との和解を体験し、主に栄光を帰すことを人生の目的としている人々です。

しかし、ここにまだ罪の生活を送り、神から離れて生きている方がおられるなら、いま警告の言葉を語らせてください。そのような状態のまま死を迎えると、死後に変な裁きを体験しなければならないのです。まず罪の赦しを受けて、聖なる神の臨在に入る資格を受ける必要があります。そうでなければ、決して天国に入ることはできないのです。

しかし愛する皆さん、そのような人のためにこそ、主イエスはこの地上に来てくださいました。皆さんはキリストなしでは罪人のままです。そして自分の力で自分を救

うことはできません。この世の人は、第二の人生を始めることができると、偽りの言葉を語りますが、人生の歩み方を変えたからといって、神の聖なる怒りを満足させることはできないのです。罪はあくまで罪として罰せられなければなりません。でなければ、神が御自分の聖なる裁きをいい加減に済まされることになってしまいます。しかしそのような御怒りから私たちを救い出すために、主イエスはこの地上に来てくださいました。そして私たちの罪を身代わりになって背負ってくださったのです。本来ならば、私たちが身に受けなければならない苦しみを、主が代わりに負ってくださいたのです。この救いの御業が完成した今、父なる神が私たちに求めておられることは、ただ一つです。それは、永遠の裁きから救われるために、主イエス・キリストを救い主として受け入れ、信頼を置くことです。イエス・キリストにのみ救いを求め、この方を仰ぐものは必ず救われるからです。

どれだけ罪を犯していようと、そのすべては赦されます。いや、罪が赦されるだけではありません。神はその時点から、あなたを神の子供として扱い始められるのです。神の相続人、キリストとともに御国の共同相続人としての歩みを始めることがで

きるのです。

ただ主イエスを信じるだけです。それだけですべての罪が赦されます。それだけで神の子供となることができます。何という栄光に満ち、偉大な救いでしょうか。すべての方々が、このすばらしい救いを感謝をもって受け入れられることを願います。

すでにイエス・キリストを主として仰いでいる方々は、キリストにあつて大胆でありましょう。そして主のために働くのです。生半可ではなく、キリストの戦士として忠実に戦い抜きましょう。

心を主に定めようではありませんか。神の御前に歩み、聖なる、平和で喜びに満ちた交わりの中を絶えず歩みましょう。父なる神は、キリストを通して、私たちをこの愛の交わりに導き入れてくださったのです。この地上の生涯で、神に近く歩むことができるとは、何という祝福でしょうか。すべてにおいて主の導きを求め、他の人々に祝福を流して行くことができますように。そうすれば、当然の結果として、私たちが自身に豊かな祝福にあずかることになるのです。

## 第二章 喜んで捧げる祝福



## 捧げることの祝福

私は救われてから今日に至るまでの五〇年間、神の恵みによって、聖書が語っている捧げることの原則に従って生活してきました。捧げることによって、私自身が体験した霊的祝福には計り知れないものがあります。神が経済的な祝福を注いでくださるのに応答して、喜んで捧げるときに伴う恵みを、言葉で充分に語ることはできません。この捧げることを実行に移し始めた頃の私には、ほんの一握りのお金しかありませんでした。しかし捧げ続けていく中で、神がさらに多額の献金をするようにと経済的祝福をお与えくださったのです。そしてついには、主は虫けらに等しいこの私を、恵みによってお用いになることをよしとされました。その結果、毎年巨額の献金を捧げることができるようになったのです。

ところが残念なことに、多くのクリスチャンは、与えられたものの管理者として、

主に任されたものを捧げていないために、このすばらしい霊的祝福を受けられないでいるのです。そのような方々は、自分に任されたものを自分の所有物と考えています。すべてが自分のものであると思ひ込んでしまうのです。あたかも朽ちない天の宝を相続しているかのように錯覚しているのです。そして自分が持っているもので、主に与えられたものでないものは一つもないということを忘れているのです。私たちが存在していることですら、キリストの尊い血潮によって贖われたからだということが、どこかに飛んで行ってしまっているといった言いすぎでしょうか。

肉体的健康、時間、才能など、自分の自由になるもの、あるいは事業、職業、さらには眼、手、足——といったものでさえ、すべては本来主イエス・キリストのものです。主イエスの聖い血潮によって贖われているからです。

ですから愛するクリスチャンの兄弟姉妹、今私が語っている主に捧げるといふ課題に心をとめていただきたいのです。そして、主が祝福してくださるのに応じて、またしっかりとした計画を持って主に捧げ物をしないことによって、どれだけ大きな霊的祝福を失っているかに気づいて欲しいのです。

## 計画的に捧げる

私がここで述べているのは、決して一時的な衝動による捧げ物のことではありません。例えば宣教師や社会福祉に携わる方々の説教に感動して、その場限りの献金をすることを語っているのではありません。そうではなく、神が与えてくださる祝福のうちを歩み、一定の原則に従って、計画的に、また習慣的に捧げることをいつているのです。

たとえば主があなたに一ポンドを与えられたとしましょう。その場合、その何割かを主にお返しするのです。あるいは一〇〇〇ポンドの遺産を相続したなら、その何割かを主に捧げるのです。

主がさらに額を大きくしてくださり、一万ポンド（あるいはその額がいくらであれ）をお与えくださったなら、その比率を変えることなく、主にお返しすべきものをお返

しすることです。ああ、愛する皆さん。この祝福の大きさに気づくなら、感情に左右されることなく捧げるようになるに違いありません。また現在捧げている一〇〇倍もの献金を喜んですることでしょう。

主は霊的な原則に従って物事を進められる方です。例えば主がどのような人を用いられるかということを考えてみましょう。主イエス・キリストの愛の迫りを感じ、いても立つてもいられない状態にある方々をお用いくださるのです。同様に、より多く捧げる者に、主はさらに多くを与えられます。

しかしここで覚えておかなければならないことがあります。それは、私たち人間の側で、主がどれだけのお金を任されるのか、あるいは捧げる祝福を他の人々にも証しする特権をどれだけ与えてくださるのかを決めることはできないということです。

## 二千ポンドの献金

ここで私の個人的な体験をお分かちさせていただきたいと思います。捧げ物をするようになった最初の年、主は私に五〇ポンドのお金を任せてくださいました。しかしその額は増加し続け、現在は年間二千ポンドもの献金をさせていただいています。私ジョージ・ミュラーは貧しい人間です。今日に至るまで無一文の人間です。そしてまわりの人々にも貧しい人間として知られています。私自身もこの事実を隠そうなどとは思いません。それなのに、神はその無一文のジョージ・ミュラーを豊かに恵み、用いてくださいました。捧げ物をするようになってから現在に至るまで、総額四万ポンドの献金を主にお返しすることができたのです。

ごく最近のことです。神が憐れんでくださり、次から次へと遺産を譲り受けることになりました。そのおかげで、年間二千ポンド、そしてある時には三千ポンドもの金

額を捧げることが可能になったのです。この貧しい私に主がこのような働きを任せられるとは、何という特権、何とすばらしい誉れでしょうか。

神の恵みによりこのように言うことができます。私は、このままの貧しい状態にいつまでもとどまっていたいと思っています。自分のための家などは欲しくありません。基金を設けて、そこに自分のためのお金を貯めるつもりもありません。自分のための土地など一エーカーも欲しくありません。

このような完全に貧しい人物であり続けたいのです。そして必要なすべての物に関して、身につける洋服にいたるまで、これからも神にのみ抛り頼んでいきたいのです。

私は今お話ししたように、すべてのことに関して主に抛り頼んでいます。それなのに、主はその私に過去五〇年間を通して四万ポンドもの捧げ物をさせてくださいました。私がこのようにして、主が与えてくださる祝福の管理者として生活を始めたのは、一八三〇年のことです。始めた当初、捧げる額はほんのわずかでした。しかし現在に至るまで、主は捧げる力を増し加えてくださっています。そして今では一年に二

千ポンドから三千ポンドのお金を捧げることができるようになっていくのです。

### 捧げることが求められる

どうしてこのような個人的なことを持ち出すのかといわれるかもしれませんが、それは、計画的に献金するようにと、愛する兄弟姉妹たちを励ましたいからなのです。今まで一度もこのような献金をしたことがない兄弟たちがおられるのでしたら、ぜひ今日から始めてください。これは皆さんの魂の祝福、そして経済的な祝福につながるからです。そして捧げれば捧げるほど、主はより多くを与えてくださるでしょう。

何もジョージ・ミューラーの真似をしると言っているわけではありません。しかしこれだけは述べておきます。どうか捧げることが求めてください。そしてたとい金額的にどんなに少なくても、計画的に継続して捧げて欲しいのです。収入の二〇分の一であつたとしても、計画的に継続して捧げるのです。そうするなら、魂が霊的に祝福さ

れ、潤っていることに気づくはずですよ。そして、あなたは主の恵みの管理者としての歩みがどれほど祝福に満ちたものであるのかを知ることになるでしょう。そしてこの道をさらに前進して行きたいという願いを抱くに違いありません。

第三章 パウロの刺<sup>とげ</sup>

「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。」(第二コリント二・八)

この御言葉にもあるように、人生の問題に出遭ったとき、私たちのすることははっきりとしています。それは、すべてのことを主に打ち明けることです。人生の大きな試練に限らず、ごく小さなことに思えることに關して、主に打ち明けるのです。

なぜなら神は、天国におられる親しい友人だからです。そしてこの方はその性質上、御自分の子供たち一人ひとりを助けることに、何よりも喜びを覚えられます。この天におられる神が友人であるということに気づくこと以上の祝福が、果たしてあるでしょうか。そして日々、いつもこの方と共に歩むことほどに、大きな祝福はないと思います。

この使徒パウロの叫びに、神は次のように答えておられます。

「私の恵みはあなたに十分である。」

これはどういう意味でしょうか。主はこの御言葉を通して、こうおっしゃっているのです。

「あなたはわたしの子です。だからわたしの取扱いのすべては、あなたにとって最善のものなのです。わたしは、あなたからどんな時にも離れはしない。わたしはどのような苦難の中にあっても、あなたの助け手であることをやめたりはしない。あなたはすでにわたしの一人子を救い主として受け入れているからです。このことを忘れなければ、どのような苦難や試練にぶつかろうとも、わたしに栄光を帰す機会を見失うことはないでしょう」

神の恵みを受けるとはどういったことなのかを体験的に知ると、どのような状況下にあっても、そしてどのような時にも、神のお取扱いに完全な納得を覚えることができるようになります。喜びの時も、悲しみの時も、あるいは病に苦しむ時も、あるいは健康な時も、すべてが神の主権のもとにあり、神の許しなしに起こることは一つもないことがわかるからです。主はこのようにどのような状況の下でも、神に栄光を帰

す機会を私たちにお与えになっているのです。これこそが、すべてのクリスチャンにとって、生きる目的ではないでしょうか。救われた瞬間から、毎日の生活の中で重要なことは、主が私たちをどのような状況の中に置かれたとしても、いつも、神に栄光を帰するということです。

このような心の態度をとると、その結果として、聖霊による平安と喜びが、一日中私たちの心に注がれるようになります。

肉体を持って地上の生活を送っているこの瞬間から、魂に天の喜びが限りなく注がれるのです！

ああ、この恵みが私たちクリスチャンの心に、さらに具体的に現れますように。そうすればこの一九世紀の終わりにあって、神の教会はさらに熱心に神に栄光を帰すことができるようになるでしょう。

さて次の御言葉に移ります。

「私が弱い時にこそ、私は強いからです。」

弱さに悩まされること。それは実は祝福なのです。主イエス・キリストの力は、弱さを通して現されるものだからです。主イエスが私たちを見捨てたり、見放したりすることは決してありません。私たちの弱さが致命的なものであればあるほど、主は私たちに近づいてくださり、力を現してくださるのです。必要が山積することは辛いことです。主の助けが近く、主御自身が近く、主が私たちの親しい友として、御自分を現してくださると信じる根拠をより強く持つことができますからです。この恵みに気づくとき、どれほど大きな平安と慰めが心に注がれることでしょうか。

そしてこれは単なるおとぎ話ではありません。私自身、この恵みをもう七〇年以上も体験してきました。困難が大きければ大きいほど、試練が厳しければ厳しいほど、主の助けもまた近かったのです。私は今まで数知れない試練を通ってきました。しかしその一度として、愛する主が私をお見捨てになったことはありません。

「もうこれで一卷の終わりだ」と思った時もありました。しかし終わりになったことはなかったのです。そしてそれはこれからも変わることはありません。なぜなら主イ

エスが御自分の民をお見捨てになることはありません。主の民の必要が大きければ大きいほど、主の助けは近くにあるのです。

あと少し祈りさえすれば、あと少し信じさえすれば、あと少しだけ忍耐すれば、神の祝福が与えられるのです。

将来、どのような困難や試練がやって来るとしても、私たちが怠ってはならないことは、ただ主イエスから眼を離さないことです。

なぜなら、イエスから助けが来るからです。イエスだけがすべてを統べ治める主であられるからです。この主が私たちを離れたり、また捨てたりということは決してありません。

ですから試練のとき、私たちがしなければならないことは、主の御前で魂を注ぎ出すことです。そうすれば、主の時に主の方法で、必ず助けは与えられるのです。

#### 第四章 落胆したとき



「わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているか。」（詩篇四二・五、一一）

詩篇の詩人はこう自分に問いかけています。私たちもまた、自分にこのような問いかけをすることがあるかもしれません。私たちが絶望する根拠というものが、果たしてあるでしょうか。

二つだけあります。

もし私たちがまだ救われていないなら、絶望する理由は大いにあります。さらに救われていながら、罪の中で生活しているのなら、やはり絶望するしかないでしょう。しかしこの二つ以外に、人間が絶望する理由はありません。というのも、私たちが今述べた二つの状況に該当しないなら、問題が何であれ、感謝をもって捧げる祈りと願いによって、神の御前に持って行けるからです。必要が何であれ、またすべての逆境、困難にあつて、神の愛と力に対して信仰を働かせることが可能だからです。信じさえすれば、主は御自分の時に、祈りと信仰に応答してくださるのです。

この節の次の言葉はこうです。

「神を待ち望め」

このことをお忘れにならないください。困難がどれだけ大きく思え、解決不可能に見えても、私たちの側でしなければならないことは、ただ神に希望をおいて主を待ち望むことです。そしてこの信仰が無駄に終わることはありません。主が定められた時に、必ず助けは来ます。

私がクリスチャンになってから、もう七〇年と四カ月が経とうとしています。しかしその間、何百、いや何千回も、主はこのように私をお取り扱ってくださいました。助けを期待することは不可能だと思われたときにも、助けは確かに来たのです。なぜなら、主には独自の資源があつて、その種類も何百、何千と数知れないからです。神の資源は無限ですから、私たち人間の場合のように、あのこと、このこと、あるいは二〇回までなら、と限定されることは決してないのです。一万回にのぼる異なった状況

で、主は一万回の異なった方法を用いて私たちを助けられます。私たちの側でなすべきことは、問題を幼子のような単純な心で主に申し上げることです。そして主の御前に魂を注ぎ出すことです。その祈りの中でこう神に叫びましょう。

「私はこの祈りを聞いていただくのに決してふさわしいものではありません。しかし私の代わりにあなたに完全に従われた方、救い主イエス・キリストのゆえにこの祈りに応えてくださいますように。そしてあなたの時に祈りの応えが与えられるまで、静かにあなたを待ち望む恵みをお与えください。あなたの定められた時に、あなたの方で祈りに応えてくださることを信じます」

私の場合、このような祈りを捧げて、祈りが応えられなかったことは一つの例外を除いて（この課題は、一八四四年の十一月一〇日以来、祈り続けています）一度もありませんでした。この生ける神が祈りに応えてくださるという事実が、私の人生にどれだけの変化をもたらしたかには、計り知れないものがあります。祈りの現実を知って、私はどんなに幸福な人間となったことでしょう。現在、私は非常に高齢です。それでもなお、私は幸福なのです。

「私はなおも神をほめたたえる。」

あと少し祈りさえすれば、あとすこし信じさえすれば、あと少し忍耐をもって神を待ち望みさえすれば、その結末は大いなる祝福となります。自分の体験を通してこの事実の確かさをもう何百回と確かめてきました。ですから私は自分にこう言い聞かせることにしているのです。

「神に希望をおいて主を待ち望め」

「私の救い、私の神を」

この点を覚えておくことは非常に重要です。詩篇の作者が誉め讃えている神は、私たちの神だということです。全治全能の神は、私たちが信じる神なのです。ですから私たちは、主をさらに待ち望み、さらに忍耐を働かさなくてはなりません。なぜなら

神の時が来て、待ち望みの期間が無駄ではなかったと知ることができるからです。

この詩篇の作者は、率直に、自分の魂が絶望的な状態に窮していることを認めています。

「私の神よ。私のたましいは御前に絶望しています。」(四一・六)

私たちも主を待ち望むのに疲れ果てたとき、時にかなった励ましの言葉を語ってくださるように求めることができます。主が自らイザヤ書五〇章四節で約束しておられますから、そうすることは良いことなのです。困難や厳しい試練に遭い、あるいは何か大切なものを失って疲れ果てたとき、または負っている十字架のゆえに、あるいは病気で非常に弱められた——そのようなとき、私たちは主イエス・キリストにすがることができます。そして主の尊い約束を持つて主に語ることができるのです。

「主イエスよ。疲れ果ててしまいました。どうか、私が必要としている言葉をかけてください」

このように祈る時、主は必ず応えてくださいます。私たちを慰めてくださり、霊的に新たな生命を与え、聖霊によって内なる人を強めてくださるのです。

このように主イエスを試してみたことがない方がいらっしゃるなら、そのような方に特にお勧めしたいことがあります。主を試してみてください。そうするなら、主イエスがどれだけあなたの祈りに応えるのを待ち望んでおられるかを発見されることでしょう。

第五章 友なるイエス

尊い救い主イエス・キリストは、私たちの友です。この恵みに私たちすべての眼が開かれますように。「友なるイエス」という言葉は、決して空しい、力のない宗教的な慣用語ではありません。そうではなく事実、主イエスは私たちの友なのです。苦しみの時にこそ、すべてを共にしてくださる兄弟なのです。いや、実の兄弟よりも近くいてくださる方です。この方が私たちを見捨ててどこかに行かれるなどということは決してありません。

天に帰る前から、天から来られたこの友に恵まれるとは何という祝福でしょうか。なぜならこの方と生活を共にすることによって、現時点で、たといわずかながらでも、天国の前味を心の中で楽しむことができるからです。そしてまさにこれこそが、天におられる父が私たちにお与えになりたいと願ってやまないものなのです。そうです、天の父は、私たちがこの肉体において地上の生活をしている今から喜びに満ち溢れることを願っておられるのです。この事実を受けとめると、すべてに優って麗しい主は、毎時間、そして日々、御自分が確かに私たちの友であることを証明してくださいます。

夜眠りにつけないで苦しんでおられる方がいますか。その方は主イエスにこう申し上げてください。

「友なるイエスよ、少し睡眠を取らせてください」

肉体的な痛みを負っておられる方がいるかもしれません。その方は主イエスにこう申し上げます。

「友なるイエスよ。御心ならば、どうかこの痛みを取り除いてください。でも主よ。この痛みが続くことによって、何かの益になるのですたら、この苦しみの中で私を支えてください。助け、力づけてください」

孤独に苦しんでおられる方、心が渴いて疲れ果てている方々がおられるでしょうか。麗しい主イエスの腕の中に飛び込みましょう。そのときにあなたは、孤独のさなかにあって、主はあなたの最愛の友となってくださるということを見出すでしょう。私自身が恵みによってこのことを体験しました。六二年と五カ月の間、私は愛する妻と本当に楽しい生活をして来ました。ところが現在私は九二歳なのですが、また再び一人ぼっちになってしまいました。妻を失ってしまったのです。しかし皆さん！

私には心を打ち明けることのできる方がいるのです。

私は自室を行ったり来たりしながら、主イエスにこう言います。

「最愛のイエスさま。また一人ぼっちになってしまいました。しかし一人でありながら、一人ではありません。あなたがともにいてくださるからです。あなたは絶えず私の友となってくださいました。ですから、主よ、私を慰めてください。憐れんで、力づけてください。この貧しい僕に、あなたが必要だと思われるすべてをお与えくださいますように」

愛する皆さん、聞いてください。これは現実です。きれいごとやおとぎ話ではなく、主イエスは私たちの最愛の友なのです。

ですからこのことを知っておいてください。私たちは、確かに主イエスは自分の友であると確信できるまで、満足してはなりません。そして、いつも変わらず最愛の友なのだとな得できるまで、あきらめてはなりません。このことを黙想してみてください。主イエスは私たちを見捨てることも、見離すこともありません。常にどのような状況にあっても、主イエスは確かに私たちの友であることを実証されます。

そして主は、この恵みを単に数カ月、あるいは数年の間だけお与えになるわけではありません。そうではなく、この地上の旅路の最後まで、いつまでも最愛の友でいてくださるのです。ダビデ王も詩篇二三篇でこう語りました。

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたがわたしとともにおられますから。」

ああ、兄弟姉妹たち、何とすばらしい恵みでしょうか。

そしてこの麗しい主は、再び来られるのです。そうです、すぐにでも主は来てくださいます。私たちを永遠の故郷に連れて行くためにです。その岸边に私たちが着いたら、このイエスと永遠とともにいることができるようになります。このことは、何と喜びに満ち、栄光に輝く恵みでしょうか。

さてここでも重要となって来るのが、この恵みを自分のものとして受け取るということです。

「主イエスは、この私を個人的に迎えに来てくださる。哀れで貧しく、罪深い私。価値のない、滅ぼされて当然の私。その私を御自分の御元に連れて行くために主は迎えに来てくださる！」

そしてこのように栄光に輝く恵みを自分個人のものとして受け入れるなら、天国の喜びがすでに与えられていることを知ります。

## 第六章 御心を確認する方法

一、まず初めに私は、問題が何であれ、自分の心が人間的な意志を握っていない状態になることを求めます。人々が直面している問題の九〇パーセントはここに原因があると思います。私たちが遭遇する苦難の九〇パーセントは、それが何であれ、神の御心に従う心を持つときに解決します。そしてこのような心の状態になれば、神の御心が何であるのかを知るまであと一歩といえるでしょう。

二、その後、私は決して一時的な感情や単なる印象のみによって決断を下したりすることのないように気をつけます。でないと大変な思い違いをすることになりやすいのです。

三、次に私は聖霊の導きを御言葉に関連した形で、あるいは御言葉を通して求めます。聖霊と御言葉を切り離して考えてはなりません。御言葉を見無視して、聖霊だけを見ようとするなら、やはり大きな間違いをすることになります。聖霊が私たちを導かれるときは、常に御言葉に従って導かれます。聖霊が御言葉に矛盾することを

なさることは決してありません。

四、次に私は摂理的な出来事を考慮に入れます。この摂理はたびたび、御言葉と御霊の導きに関連して、神の御心が何であるのかを明示してくれます。

五、はつきりとわかる形で御心を示してくださいるように、神に祈り求めます。

六、このように、神への祈り、聖書の研究、黙想を通して、与えられた能力と知識を駆使し、主の御心が何であるのかを慎重に判断します。その後、もし私の心に平安が与えられていれば、そしてそれがその後二、三回祈ってからも続くようなら、その判断に従って実行します。

小さなことから非常に重要な交渉に至るまで、この方法は非常に効果的であることを発見しました。



現在（一八九五年三月）まで、私は、六九年間と四カ月のクリスチャン生活を送って来ました。その間、真心を込めて、そして忍耐がよく神の御心が何であるのかを知ることを求めた場合、聖霊の促しと聖書に従って、正しく導かれなかったことは一度もありませんでした。しかし神の御前で心の正直さと誠実さが欠けているとき、あるいは忍耐をもって神の導きを待ち望まなかった場合、あるいは生ける神の言葉よりも他のクリスチャンの助言を尊重したとき、私は過ちに陥ってしまったのです。

### 第三部 講解メッセージ